

散歩行動における河川利用者と非利用者の特性について

宮崎大学 学生会員 吉田幸平

宮崎大学 正会員 吉武哲信

宮崎大学 正会員 出口近士

1. はじめに

近年、社会の成熟に伴い、散歩行動に配慮した空間整備の重要性が増している。また、河川空間は治水・利水機能だけでなく通風や日照の確保など都市空間における貴重な自然的空間として注目され、散歩においても魅力的な場所として利用されている。

ここで、先行研究である牧らの研究¹⁾では、宮崎市中心部を流れる大淀川に架かる天満橋周辺を対象として、散歩に配慮した空間整備に伴う散歩経路の変化について研究を行ってきた。その結果、天満橋や大淀川河川敷が魅力的な場所として多くの散歩者に利用されていることが明らかになった。しかし、この研究は、河川空間で散歩を行う人々を対象として行われたものであり、そもそも、河川近くに居住するにも関わらず、散歩に河川空間を利用しない人々がどのような散歩行動をとっているのか明らかにしていない。散歩における河川空間の利用者・非利用者を規定する要因やそれぞれの散歩行動の特性を明らかにすることは、河川空間のみならず、その周辺を含めた空間整備のあり方の検討に何らかの知見を与えると考えられる。

以上より、本研究では河川利用者、非利用者の散歩行動の傾向を明らかにする。具体的には、調査対象地区の散歩者へのアンケート調査に基づき、1)河川利用者・非利用者の散歩行動特性の違い、2)利用者・非利用者を規定する散歩行動特性について分析を行う。対象地区は図-1に示すように、一級河川の大淀川とその周辺に住宅地の位置する天満橋周辺部である。

2. 調査の概要

アンケートの質問項目は表-1に示すように個人属性、散歩行動特性、経路変更特性、散歩経路に関するものである。アンケート票は平成20年10月、地区内の散歩を行ったことのある住民を対象に、自宅を直接訪問して配布し郵送で回収した。その結果、600

表-1 アンケートの質問項目

	質問項目	回答方法
個人属性	性別、年齢 など	多肢選択式
散歩行動特性	散歩の種類、目的、時間 など	多肢選択式
経路変更特性	変更理由、繰返しの有無、周期 など	多肢選択式
散歩経路	散歩経路(最大3つ)	地図に記入



図-1 アンケート配布範囲とリンク利用者数

票配布し、208票が回収(回収率34.7%)された。こ
こで、散歩経路については最大3つまで回答してもら
ったため、サンプルは391経路であった。

なお、図-1にはリンク利用者数を併せて示している。図より、大淀川河川敷や橋の利用者が多いことがわかる。ここで、河川利用者と非利用者の延べ人数を分類すると、河川利用者が延べ215人(55.0%)、非利用者が延べ176人(45.0%)である。よって、これらの河川利用者と非利用者を比較していく。

3. 河川利用者と非利用者の散歩行動の傾向分析

(1)河川利用者・非利用者の散歩行動特性の違い

利用者と非利用者の個人属性・散歩行動特性の違いを明らかにするために、質的な質問項目については構成率で、量的な項目については平均値でそれぞれ有意差の検定(有意水準5%)を行った。その結果「性別」「経路選択の際の最重要項目」「散歩の種類」「散歩時間(表-2)」「平均散歩距離・平均時速(表-3)」「散歩の目的(表-4)」の項目について有意差があり、今回は紙面の都合上、代表的な結果のみを示す。

河川利用者は表-2より、非利用者に比べ1時間以上の散歩を行う割合が約3割と高い。さらに表-3より、

表-2 散歩時間

	利用者	非利用者
合計	215 100%	176 100%
30分未満	8 3.8%	40 23.1%
30分～1時間	126 60.6%	107 61.8%
1～2時間	69 33.2%	26 15.0%
2時間以上	5 2.4%	0 0.0%
不明	7	3

表-3 散歩距離と
時速の平均

	平均距離	平均時速
全体	3.5km	3.9km/h
利用者	4.2km	4.3km/h
非利用者	2.6km	3.3km/h

表-4 散歩の目的

	利用者	非利用者
合計	215 100.0%	176 100.0%
気分転換	30 14.8%	20 11.7%
健康維持	144 70.9%	103 60.2%
日課として	6 3.0%	5 2.9%
犬の散歩	17 8.4%	31 18.1%
子供のおも	1 0.5%	6 3.5%
ひまつぶし	0 0.0%	0 0.0%
なんとなく	2 1.0%	1 0.6%
その他	3 1.5%	5 2.9%
不明	12	5

表-5 数量化Ⅱ類の分析結果

項目名	カテゴリ名	n	カテゴリスコア	レンジ	偏相関	項目名	カテゴリ名	n	カテゴリスコア	レンジ	偏相関
性別	男性	166	0.022	0.047	0.156	距離	0～1km	10	-1.784	3.069	0.486
	女性	144	-0.025				1～2km	46	-0.718		
最重要視	道すじ重視	151	0.062	0.198	0.127		2～3km	82	-0.407		
	時間・距離重視	109	-0.053				3～4km	69	-0.329		
	経由点重視	35	-0.044				4～5km	47	0.844		
	同じ場所を回避	15	-0.136				5～6km	34	1.228		
							6～7km	16	1.110		
目的	気分転換	48	0.192	0.474	0.011		7km～	6	1.285		
	健康維持	212	-0.029			家と川の往復距離	0～0.5km	34	0.879		
	日課	10	-0.282				0.5～1.0km	42	0.965		
	犬の散歩	33	0.017				1.0～1.5km	66	0.405		
種類	子供のおも	7	-0.117	1.026	0.273		1.5～2.0km	75	-0.441		
	歩くことを目的	196	-0.068			2.0～2.5km	66	-0.792			
	ある場所で時間過ごす	7	-0.392			2.5～3.0km	27	-0.438			
	いくつかの場所を周遊	77	0.438			判別の中率: 84.2%					
	観察が目的	30	-0.588			相関比: 0.506					

河川利用者は非利用者より散歩距離が1.6km長く、散歩速度も1.0km/h速い。表-2の結果と併せて考えると、河川利用者は散歩距離と時間が長く、散歩速度も速いため、「健康維持」を強く意識していると考察できる(表-4)。

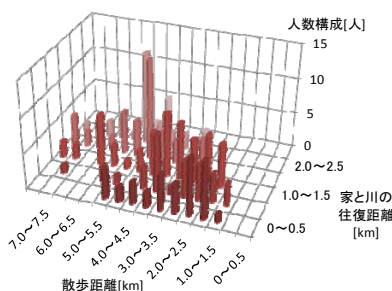
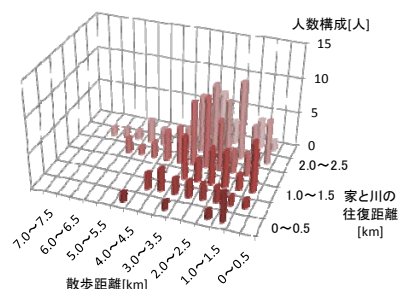
一方、非利用者は表-2より、30分未満の散歩を行う割合が約2割と高い。また、散歩距離・速度も利用者と比べると低い。表-4では、非利用者は犬の散歩目的の割合が約2割と比較的高いことがわかる。

(2) 利用者・非利用者を規定する散歩行動特性

利用者と非利用者を規定する散歩行動特性を把握するために河川の利用と非利用を目的変数に、利用者・非利用者で有意差のあったアイテムを説明変数として数量化Ⅱ類を適用した。ただし、散歩距離と散歩時間は相関が強いため、後者は説明変数から省いた。なお、便宜的に散歩距離は1km間隔で、家と川の往復距離は0.5km間隔でカテゴリーに分類している。分析結果を表-5に示す。今回のモデルは判別の中率84.2%、相関比0.506と、ともに比較的高い値を示しており、信頼できるモデルといえる。

表より河川利用者・非利用者の判別には「散歩距離」や「家と川の往復距離」の2項目が寄与し、散歩距離が長い程、家と川の往復距離が短い程、利用する傾向にある。

そこで、利用者におけるこの2項目の関係を図-2、非利用者における2項目の関係を図-3に示す。数量化Ⅱ類の結果から、河川利用者はグラフ(図-2)の左手前に山ができることが予想されるが、実際は右手前

図-2 散歩距離と家と川の
往復距離の関係(利用者)図-3 散歩距離と家と川の
往復距離の関係(非利用者)

に集まり、比較的広く分布している。一方、非利用者においてはグラフ(図-3)の右奥に山ができることが予想され、これと整合した結果が得られた。

これらの結果より、非利用者は「家と川の距離が長いと河川を利用しない」という傾向が強いが、河川利用者は「家と川の距離が短い程河川を利用する」という傾向はさほど強くないことがわかる。

なお、家と川の距離が長いにも関わらず、河川を利用する者は、散歩行動特性より、低い頻度で、ゆっくりといくつかの場所を周遊する者である。

5. おわりに

本研究は、河川利用者、非利用者の散歩行動の傾向を明らかにしたものである。この結果次のような知見を得た。(1)河川利用者は一般的には散歩距離が長く、散歩速度も速く、川に近い程利用する傾向にある。しかし、家と川の距離が長くても河川を利用する散歩者もあり、これは低い頻度で、ゆっくりといくつかの場所を周遊する利用者である。(2)非利用者は、短い距離をゆっくりと散歩し、家と川の距離が長いと河川を利用しない傾向にある。

参考文献

- 1) 牧, 吉武, 出口, 外井: 散歩に適した空間整備がなされた地区における散歩行動の実態と散歩経路変化に関する研究, 日本都市計画学会論文集, No.43-3, pp.409-414, 2008.